

イエーツ

『西ヨーロッパにおける食糧、
土地および労働問題』一九六〇年

逸見 謙 三

P. Lamartine Yates, *Food, Land and Manpower in Western Europe*, 1960, pp. xiii, 294. は小冊子ながら極めて興味深いものである。これは一言でいえば西ヨーロッパ農業の基本問題調査報告である。二〇世紀財団が、かつての J. Frederic Dewhurst, *America's Needs and Resources*, 1947 (第二版一九五五年) と同じような研究を西ヨーロッパについて行なったものの一部が本書である。本書の目的とする処は一九七〇年を目標年次とした将来の農業経済のあるべき姿の描写である。まずヨーロッパの新しい状況の素描から説きおこし、食習慣の現状の説明と一九七〇年に到る食糧消費増加の予測を一方でなし、農業経済の現状の説明と一九七〇年に到る食糧生産増加の予測を

他方でなしている。かくて一九七〇年における農産物市場状況が描かれる。更にこれらの過程ないしは状況が労働市場とか輸出入とかに及ぼす影響、最後にこの間における政府の役割を検討している。

最近の流行として、筆者の知る限りでも、西ヨーロッパのいくつかの国でこのような事がなされ、更に新しい農業政策が打ち出されている。そのいくつかはわが国にも紹介され、わが国の農業基本問題の討議において参考とされたことは多くの人々の知る所である。しかしこれを西ヨーロッパの全体について行なったものは本書が最初であるし、同じ問題と取り組んでいるわが国関係者の非常な参考となろう。

周知の如くイエーツには *Food Production in Western Europe*, 1940 なる著書がある。最近では *Forty Years of Foreign Trade*, 1959 によって国際貿易、統計分析の分野に偉大な貢献をなした。またわが国では余り知られていないが、初期の商品問題研究において、メーソンのものと並んで、評価されている *Commodity Control, A Study of Primary Products*, 1943 もあるし、評者未見の FAO に関する *So Bold an Aim*, 1955 もある。何れも第一級の貢献であり、イエーツが本書の主題に関する最高権威であることを示している。評者は、本書はこれ等多数の著書の中でも最も良く書かれたものと考ええる。(尤も本

書はいささか解説風に書かれているので、上述の比較は百パーセント正確なものではない。

一九七〇年に到るまでに西ヨーロッパでは三〇パーセントの農業増産と二〇パーセントの農業人口の減少が見込まれる。そしてアルプス以南の諸国を例外とすれば農産物は現在でも過剰傾向への途上にあり、一九七〇年までには明らかに過剰傾向となる。また農産物の生産費も低下するであろうから、現在採用されている支持価格制度等は修正されざるをえないし、西ヨーロッパの食糧価格は余程国際水準に近いものとなる。

アルプス以南の地域では宗教的影響とか、現実の資源の存在とか、更には一部はその結果である経済発展の未熟なことのために、農業増産の程度は低いものであろうし、需要は一層の増加が予測される。更にこれ等の国、又ドイツ、フランス等でも畜産の発達は一層努力されねばならない。地中海沿岸諸国では飼料生産が未発達であり、独仏等では穀物保護の程度が異常に強くて畜産の発達を阻害しているからである。このような部分的な増産の必要は勿論あるが、一般的に言って上述の過剰傾向は明らかであり、人口の流出は望まれる。しかしフランスの事例調査が明らかに示している処であるが、人口の流出も、それが最も望まれている遠隔地からは特に少ないのである。又イタリアの Vanoni 計画を例外とすれば、各国政府の政策は新し

い事態にそれ程適したものではない。

第二のグループに属する問題はいわゆる構造の問題である。

勿論家族農業が望ましいが、これは極めて伝統的なものであり、スペインのセカノの農業の如きは一七世紀から殆んど変化していない。これに如何にして新しい技術の進歩を導入するかの問題がある。デンマークの如く非常に早くこれを達成した国も、又他の若干の国々の機械化の例の如く、戦後になってこれを大幅になしている国々もある。しかし一般には、ヨーロッパ農業が新大陸農業と異なつて旧世界の経済であるために、構造改革はヨーロッパ農業最大の問題である。

勿論各国各様の問題を有している。またイエーツは、豊富なしかも統計に裏打ちされた知識をもとにして、これを極めてヴィヴィットに示している。しかし以上二つの問題は何れも日本農業の問題でもあり、従つて日本の関係者の非常な参考となるものである。叙述は極めて平易であり、二、三の誤植らしきものを除いては難解な処はない。広く読まれることが特に望まれる本である。